

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月1日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530941

 研究課題名（和文） 情報通信メディアにおけるコミュニケーション能力を育てる  
国語科学習指導の開発

 研究課題名（英文） Development of the Japanese learning to bring up the communications  
skills in the information and communication media

研究代表者

上田 祐二 (UEDA YUJI)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：50213369

研究成果の概要（和文）：国語科で育成する情報通信メディアにおけるコミュニケーション能力を、インターネットを公共的な空間として協働的に参加する能力ととらえ、その学習内容・方法を探究した。従来の国語科の学習内容との関連性を持たせながら、中学校において、BBSにおける話し合いの仕方を考えさせる授業を実施した。研究の結果、対面での話し合いによる発言に対する反応の意識化が、BBSへの参加の仕方に対する意識化を促すうえで有効であることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research investigated the content and method of the Japanese learning about communications skills in an information and communications media to regard an internet as a public space and to participate in collaboration. We carried out the lesson in the junior high school which makes the learner consider the method of the discussions in BBS, making it connected with the content of the conventional Japanese learning. It became clear that it is effective to make the learner conscious of the reaction to a self utterance by the discussion of face-to-face in order to consider how to participate in the BBS.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：国語科教育学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

 キーワード：国語科教育 メディア・リテラシー コミュニケーション 話すこと・聞くこと  
話し合い 情報活用 インターネット

### 1. 研究開始当初の背景

国語科教育においてメディアにどう取り組むかということは、ここ10年で急速に取りあげられるようになってきた重要な研究課題の一つである。しかしながら、これまでの先行研究は、「読むこと」「書くこと」の領域に関わるものに偏っており、情報通信ネッ

トワークを媒介としたコミュニケーションについてはほとんど取り組まれていない。

たとえば国語科教育においてメディア・リテラシーを実践的に提案するレベルにある重要な研究として、井上尚美（2003）、松山雅子（2005）、羽田潤（2008）などの研究が挙げられるが、これらに共通するのは、メデ

ィアの情報構成の方法を深く理解することによって、国語科における「読むこと」「書くこと」の能力を拡充するとともに、メディアという社会・文化的状況における自己認識を深めることがめざされているということである。

こうした研究は、PISAの調査結果にもとづき、文部科学省(2005)が「読解力向上に関する指導資料」に示した指導の指針や、平成20年版中学校学習指導要領に見られる、文章と図表などとの関連を考えながら読んだり、図表などを用いた文章を書いたりすること、目的や状況に応じて資料や機器などを効果的に活用して話すことといった内容に資するものではあるが、その一方で、メディア・リテラシーを従来の国語科の内容に容易に包摂しうるのかという問題も、藤森裕治(2003)によって指摘されている。このような問題意識からネットワークにおけるコミュニケーション能力をとらえようとする、国語科教育の立場から明らかにすべき重要な研究の視点が得られる。

というのも、ネットワークにおけるコミュニケーションは、「話すこと・聞くこと」における話し合いに類似しているように見える。しかしネットワークにおける話し合いは、非対面的状況とそれに伴う匿名性という違いがある。そしてそれが、ともすれば暴力的なコミュニケーションを誘因するといった指摘もなされている。あるいは、メディアにおける文字によるコミュニケーションは、「書くこと」における手紙などの非同期的な通信文に類似しているようにも見える。この非同期性は、暴力的なコミュニケーションへの対策を、いわゆる“ネチケット”のようなモラルや文章・文体の問題に求めることにつながっている。

しかしながら、ネットワークにおいてコミュニケーションが成立するかどうかは、モラルの問題としてとらえればじゅうぶんだとは言えない。たとえば上田祐二(2008)では、ネットワーク・コミュニケーションでは、話し合いの文脈を明確にしながら話題を展開するための発言方略が求められるとともに、ログとして蓄積された情報を編集しながら発言するなどの話し合いの文脈化が求められることを明らかにした。このことは、ネットワーク・コミュニケーションでは、「話すこと」における対話を展開する能力と、「書くこと」における情報を活用・編集する能力との接点に、国語科の学習として取り組むべき能力が求められることを示唆している。

## 2. 研究の目的

書くことによって話し合うという、ネットワークにおけるコミュニケーション能力の内実を明らかにするとともに、その能力の伸

長を図る指導の具体化を試みることによって、国語科教育における「話すこと・聞くこと」「書くこと」の指導を、情報通信メディアの活用能力を視野に入れたものへと拡充することが、本研究の目的である。

まず、国語科の「話すこと・聞くこと」「書くこと」における学習内容との関連性を明らかにする。「話すこと・聞くこと」との関連性については、今日の社会におけるネットワーク・コミュニケーションに関する理論的な考察を通して、学習目標として求めるべきコミュニケーション能力を明らかにするとともに、ネットワークにおける話し合いへの参与のしかたから、学習内容として求められるコミュニケーション能力を、明らかにする。また、「書くこと」との関連性については、ネットワークをたんなる「書くこと」において道具的に活用する情報源としてではなく、他者との相互作用を志向するコミュニケーション行為の状況としてとらえる視点から、そこで求められる能力を明らかにする。

さらに、主に中学校段階における「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習の系統性との整合性を持たせながら、学習内容としてネットワーク・コミュニケーション能力を位置づける。そして、それを踏まえた国語科の学習指導を提案的に開発・実践するとともに、その有効性を検証する。

以上、本研究は、国語科におけるネットワーク・コミュニケーションの学習を、従来の学習に関連づけた実践理論の構築ならびに実践方法を開発する点に特色がある。それによって、「話すこと・聞くこと」ないし「書くこと」領域の学習を、情報通信ネットワークを介したコミュニケーションにも対応しうる学習へと拡充することをめざしている。

## 3. 研究の方法

### (1) 情報通信メディアにおけるコミュニケーション能力の把握

コミュニケーション、情報通信メディアに関する先行研究の整理・検討をとおして、社会における情報通信メディアによるコミュニケーションの機能やその可能性、また主にネットワーク・コミュニケーションの特質やそこでのコミュニケーション方略などについて明らかにする。これらは、国語科教育における情報通信メディアにおけるコミュニケーション学習の目的・内容を導出するための理論的基礎と位置づける。

### (2) 対面での話し合いとネットワークにおける話し合いとの関連性の解明

ネットワークにおけるコミュニケーション能力は、既存の対面的なコミュニケーション能力を手がかりに獲得されると予想される。そこで、予備考察として、大学生の学習

場面を対象に、対面的な話し合いに関する認識が、ネットワークにおける話し合いの方略の発見・獲得にどのように影響するかを分析・考察する。この分析を通して、中学生を対象とした授業構想の基本的な考え方を明確にする。

### (3) 中学校における情報通信メディアにおけるコミュニケーションの学習内容の系統化

上記の研究成果を踏まえて、中学校における学習内容を系統的に把握し、その試案を作成する。ここでは、従来の「話すこと・聞くこと」「書くこと」の内容との整合性を取りながら、ネットワーク・コミュニケーションの能力と情報通信メディアにおける情報活用・構成の能力を中心に位置づける。それに加え、情報通信メディアとそこでのコミュニケーションの特質に関する理解も組み込む必要があると考えられる。

### (4) 中学校における情報通信メディアにおけるコミュニケーションの学習開発

(3)の試案にもとづき具体的な学習指導案を作成し、中学校において実験授業を行う。実施した授業を分析・検討する。特に、(2)で述べた対面でのコミュニケーションの仕方に関する既有知識とネットワークにおけるコミュニケーションとの関連性を質的に分析し、学習者がネットワークの話し合いの流れをどのように把握し、そこからどのような発言の仕方に注意しているかなどを明らかにし、学習の成果とそこでの指導のポイントを抽出し、有効な学習の手だてを提案する。

## 4. 研究成果

### (1) 情報通信メディアにおけるコミュニケーション能力

① ネットワーク・コミュニケーション能力  
インターネットがどのようなコミュニケーション空間であるかとらえられているかという視点から、先行研究を整理・検討した。その結果、携帯電話が象徴するように、インターネットにおいては、公的なモードのコミュニケーションと私的なモードのそれとが一様な情報・データとして交換される点、また、何らかの意図・目的にかかわらず、インターネット上の情報に対する応答の継続が、コミュニケーションを構築・成立させる点に特質を見出した。

これらの特質から、情報通信メディアにおけるコミュニケーションに参加するうえで、次のような認識をもつ必要があると考えた。一つは、仮に私的なモードのメッセージであっても、それに応答する情報の連鎖によって、意図せずコミュニケーションに巻き込まれてしまうといったことが起こり得るという

ことである。また、もう一つは、そのようなコミュニケーションの巻き込みは、ソーシャル・ネットワーキング・サービスのような技術的な設計を基盤に自動化されているということである。

さらにこのような認識を土台としたとき、ネットワーク・コミュニケーションにおいて求められる主要な能力は、インターネットを公共的なコミュニケーションの場として成立させるという目的意識をもたせ、理性的・合理的に問題解決を図ることに対する責任と信頼に叶う首尾一貫性した発言ができる能力、またそうした発言を展開しながら、意義ある議論の成立に向けて他者と協働できる能力、加えて、そのような自己の参与を規制するインターネットのアーキテクチャをクリティカルにとらえながら、参入するコミュニケーションの展開を読み取り、自己の発言を生み出すことができる能力であるとした。

### ② 情報活用・構成能力

①で明らかにした応答を基盤とした情報通信メディアにおけるコミュニケーション能力は、インターネットに蓄積された情報を編集し、文脈を構成する能力を求める。この点に関わる国語科における学習として、学習指導要領には、編集する活動が言語活動例に示されている。そこで、小・中学校の教科書で教材化されている新聞づくりの教材に注目して、この情報の編集力をどのような系統性を持たせながら指導できるのかを考察した。それを踏まえて、鈴木みどりのメディア・テキストの分析モデルで示された観点を参考にしながら、パーソナル、ローカル、マスのコミュニケーション・レベルへと、読み手、目的、立場、話題、情報の機能、構成・編集の方法といった観点から情報活用・構成能力を系統的にとらえた学習活動の設計モデルを提案した。

また、情報活用・構成能力とコミュニケーション能力との関係を考察した。まず、情報活用・構成能力は、情報、コミュニケーション、メディアの位相の埋め込み関係からとらえた。また、国語科の学習が念頭におく目的・相手などを意識した他者とのコミュニケーションを水平的なコミュニケーションとするならば、情報活用・構成によって発信した情報は、メディアのシステムによってコミュニケーションに埋め込まれ、アーカイブされ、それが別のコミュニケーションに再利用されていく。このような情報通信メディアのコミュニケーションを垂直的なコミュニケーションととらえ、これら水平方向のコミュニケーションと垂直的なコミュニケーションとの関係を意識させることが、学習者を社会的・公共的なコミュニケーションの営みへ

の参加を促すうえでは重要になることを見出した。

## (2) 中学校における情報通信メディアのコミュニケーション学習の内容

(1) に述べたように、理性的・合理的な問題解決を図る対話能力、目的・相手を意識した他者とのコミュニケーションに交叉する情報活用・構成能力といった能力を、情報通信メディアに求められる主要なコミュニケーション能力だとするなら、それらは、従来の国語科の学習の系統性に整合的に関連づけることができると考えられる。そこで中学校における「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習内容を踏まえながら、その拡充として情報通信メディアのコミュニケーションに関して、次のような学習内容を位置づけた。

### 第1学年

- インターネットが公共的な空間であることを理解し、他者を意識した発言ができる
- ・ログにおける発言を関連づけ、話題の焦点や論点を見出しながら発言する。
- ・立場や根拠を明確にして発言する。
- ・相手、オーディエンス、話題の人物を意識し、それに配慮して発言する。

### 第2学年

- 自由な立場から議論する意義を理解し、それを尊重した発言ができる
- ・ログの展開から議論の流れ、傾向（立場の偏り、対立の度合いなど）を踏まえて発言する。
- ・主張・立場の一貫性を意識して発言する。
- ・他者に配慮し、理性的な議論へと調整する発言をする。

### 第3学年

- 協同的に他者とコミュニケーションを図る意義を理解し、合意できる解決に向けた発言ができる
- ・立場・利害の相違・対立を乗り越えて、よりよい解決を意図した発言をする。
- ・ログから把握・整理した論点を示しながら発言する。
- ・著作権・肖像権などを尊重して発言する。他者の発言、参照情報へのリンクを利用しながら発言する。

## (3) ネットワーク・コミュニケーションに関する中学校の実験授業

2012年3月21～22日の2時間、旭川市内の公立中学校1年生を対象に、実験授業を行った。対象学年と学習者のインターネット利用の実態を踏まえ、BBSを取りあげ、それがどのようなコミュニケーションの場であるのかを理解し、そうした状況で発言できるとともに、相手が発言しやすい情報提供の必要

性に気づくことをねらいとした。学習者に個別のハンドル名を配布し、匿名でBBSに発言することを体験させるとともに、表示されたログを振り返らせながら、次の発言を考えさせる活動から、ネットワーク・コミュニケーションに求められる発言の仕方を発見させた。

学習者の発言ログから、最もよい発言を選ばせた結果を分析すると、「適切な情報を示して質問する」「根拠を示して簡潔に回答する」「相手の立場に立って発言する」といった、この実践において理解させようとした発言の仕方がとれている発言を選べるようになっていた。

この理解において、有効であったと考えられる手だてを、授業の音声記録と発言ログの展開とから分析した。その結果、数名が発言した段階で活動をとめ、その都度、発言ログの展開を振り返りながら、必要な発言の仕方を考える手がかりを与えることは、BBSを単発の発言の集積ではなく、発言間につながりを持たせながら展開するような発言を引き出すうえで有効な手だてになることがわかった。また、このような振り返りは、音声言語の学習における振り返りの難しさを、記録されたログを読むということによって乗り越えており、その点に情報通信メディアを「話すこと・聞くこと」の指導において活用することの可能性を見出した。

さらに、対面的な状況におけるコミュニケーション能力や意識が、情報通信メディアにおけるコミュニケーションにどのような影響があるかを分析した。活動の初期においては、BBSの発言を興味本位に批評する態度が見られたが、授業が展開するにつれて、発言の適切性を吟味することへと変化が見られた。この要因として、BBS上の発言につながる発言を考えさせる活動において、学習者間で発言の仕方を話し合わせたことが影響していることが観察された。すなわち、BBSに投稿した自己の発言に対する反応を、対面する他の学習者から得られたことが、BBSへの発言の仕方に対する意識化を促すとともに、そこでの他者の発言を生かしながら自己の発言を考えるという活動が、BBSの発言を生かすことに転化し、それがBBS上の発言に対して協働的に関わる発言を生み出し、結果として、BBSに対話的に展開するログが蓄積されていった。このように、対面的な状況におけるコミュニケーション能力やそこにはたらく意識を手がかりに、情報通信メディアにおけるコミュニケーションに参加させていくことは、そこで当時の意識をもち、協働的な対話に貢献できる情報通信メディアのコミュニケーション能力を育てるうえでは、有効な指導の手だてになることを明らかにした。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 上田祐二, 成田麻友子, 国語科におけるネットワーク・コミュニケーションの指導-BBSでの発言の仕方を考える学習の一事例-, 旭川国文, 査読無, 25号, 2012年, 1-14頁
- ② 上田祐二, 情報を活用する力を支えるコミュニケーション意識, 月刊国語教育研究, 査読無, 485号, 2012年, 4-9頁
- ③ 上田祐二, 国語科におけるICT活用指導力の育成を図る実践の試み-電子黒板の活用を課題とした教員養成大学における演習-, 語学文学, 査読無, 50号, 2012年, 1-12頁
- ④ 上田祐二, 国語科教育におけるインターネットのメディア・リテラシーネットワーク・コミュニケーション学習のための基礎的考察-, 旭川国文, 査読無, 24号, 2011年, 1-15頁
- ⑤ 上田祐二, 「編集する」言語活動の学習内容-新聞づくりに焦点を当てて-, 旭川国文, 査読無, 23号, 2010年, 1-13頁

[学会発表] (計1件)

- ① 上田祐二, 中学校におけるネットワーク・コミュニケーションの指導-読み手の意識化をねらいとした授業の検討-, 第123回全国大学国語教育学会, 2012年10月27日, 富山大学

[その他]

ホームページ

<http://www.asa.hokkyodai.ac.jp/research/staff/ueda/paper/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

上田 祐二 (UEDA YUJI)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号: 50213369

### (2) 研究代表者

なし

### (3) 連携研究者

なし